

「間違えてしまっても」

岡崎市立東海中学校 二年

あだち きよみ
安達 清美

赤ちゃんの頃から、母が連れて行ってくれる近所の人から愛されている小さな駄菓子屋がある。

その駄菓子屋は、電動車いすで酸素呼吸器をつけて生活している、体にハンデを持った方が経営しているお店だ。健常の方はもちろん、障害のある方たちも一緒に働いている。

物心ついた頃から、この駄菓子屋に通っている。しかしある日、先天性の麻痺でうまくしゃべれず、まっすぐに立てれない障害のある従業員さんにレジで「いらつしやいませ。」と言われた。初めて会った時にとっても驚いたのを覚えている。今まで障害のある方に会ったことは何度もあったが、車いすに乗って私たちと同じように流ちょうにしゃべっている方がほとんどだった。しかし、今まで会ってきた方たちとは違う容姿、聞き取りにくいしゃべり方に困惑した。そして、その日は友達も一緒だった。友達に、障害者の方がいる駄菓子屋に行っている事で嫌われてしまわないかととても心配だった。そんなちっぽけな思いからどこにお菓子があるか聞くときは違う人に聞き、その方を避けてしまっていた自分がいた。自分でも避けてしまっていることへの申し訳なさは感じていた。しかし、周りの友人に嫌われてしまわないか、自分が優先という思いだけでこのような行動をとってしまった。

ある日、母が障害のある方たちと話しているのを見た。みんな笑顔で、笑い声もよく聞こえ、とても楽しそうだった。私はその時、衝撃を受けた。障害のある方たちとしゃべることは普通のことなんだと。そして、私は容姿やしゃべり方など自分と違うだけで、その方たちを避けてしまったり、非難してしまいい「差別」をしていたんだと感じた。

私は、両親が障害のある方に関わる仕事をしている事もあり、小さい頃から障害のある方に触れ合ってきた。差別などには配慮してきたつもり私でも

そのような気持ちを持ってしまった。

それから私はお菓子がどこにあるか聞く際には積極的に障害のある方に聞くことを心に決めた。そのおかげで、だんだんと心を許してくれたのか、私も話の輪に入れてもらうことができ、嬉しかった。さらに車いすを二台持っている方に一台貸してもらい、遊んだことも何度かあった。車いすユーザーということをマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えるという考え方にも驚かされ、そしてマイナスだと思っても考え方を変えプラスにしようとする気持ちが勉強になった。

障害者だから、自分とは違うからといった容姿などで決めつけたり、周りの目ばかりを気にし「差別」をしないでほしい。私たちの偏見であったり、本来とは違う見方によって、障害のある方が悲しんでしまうことは、同じ人間として違うことだと思う。まずは自分からという気持ちで行動を変えていけば周りの人も変わっていくと思う。人間は他の人があることをやると、同じようにやってしまう習性がある。と聞いたことがある。例えば、部活動で厳しい練習中に誰かが手を抜けば、それを見ていた人が真似をして手を抜いてしまう。というように他の人が避けているから自分も避けるのではなく、まず自分が行動をし周りの人がそれをお手本として真似するように行動する。このようなことをいい方向に変えることで、みんなが暮らしやすい環境に近づいていけると思う。

私のように間違ってしまったでもいいと思う。気がついたらすぐに修正し、正しい方向に進むほうが間違った方向に進むことにより大切だと考える。